
IS インフィニット・ストラトス IS学園の笑う偽者

ZEOLU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス IS 学園の笑う偽者

【Nコード】

N9636Y

【作者名】

ZEOLU

【あらすじ】

これは、『インフィニット・ストラトス』に閉じ込められた転生者モドキが自分の記憶を探しながら世界観を崩壊させていくお話。結構無謀な作品です。

第0話 それは例え話（前書き）

就職活動の逃げからはじめてしまいました。
俺オワタ。

だが後悔しない。

俺はアホだから。

ということ、中二くさい0話をどうぞ。

第0話 それは例え話

2011年の冬。

一向に発売されない『インフィニット・ストラトス』の8巻に二次創作者は焦りを見せていた。

そこで彼らは一つの計画を立てた。

インフィニット・ストラトスの世界観に転生者を放り込んで自分好みの展開に書き換えてしまえば、暇な時間を消せるだろうと。

そもそもその考えがいけなかったのかもしれない。

彼らは『インフィニット・ストラトス』という“世界観”に一つの『種』をまいた。

『種』は登場人物たちの設定を少しずつ集め、大きくなっていき、彼ら好みに世界を書き換え始めた。

そこで異変が起きた。

『種』が集めた設定の中に『転生者』と呼ばれる異物が混入。『種』は世界観に合わない能力で“世界観”を滅ぼし始めた。

著作権侵害という最悪な結末を予想した彼らは『種』を創作者としての権限で一部を砕き、『種』を制御していた力を“世界観”という牢獄に閉じ込めた。

こうして彼らは著作権侵害で訴えられることは阻止された。

その頃、『種』は集めすぎた設定のせいで、彼らの意向とは関係のない自我が芽生え始めていた。『種』は架空の人物だが、確実に

生きていた。

これは『例え話』

だからからも褒められない……『例え話』

第0話 それは例え話（後書き）

ご感想はお待ちしております。
こんなんで大丈夫なのだろうか。

第1話 そいつは転生者（前書き）

結構投稿のペースは雑になります。

一応完結はさせるつもりですが、長くなります。

第1話 そいつは転生者

夜、全てが寝静まった静寂な時間。

「……………」

「噂は本当なのでしょうか……………」

私、織斑千冬と山田真耶は、最近目撃されたという謎の人物の噂を追って学園敷地内を探索していた。

「生徒が言うには…………お化け…………だそうで」

「山田君、あまり噂を気にするものではない」

「そ、そうですね…………お化けなんて」

「まったく…………明日は一夏達が入学する日だというのに、何をやっているのだろうか我々は」

「そうは言っても、生徒の不安を取り除くのも私達教師の務めですよ、織斑先生」

「……………すまない。さっきのは失言だった」

私達は学園の周囲をさらに探索する。
すると、少し霧が濃くなってきた。

「霧…………濃くなってきましたね」

「そうだな 待て、これは霧じゃない、水蒸気だ!!」

「え、ということは近くに人が？」

暗闇の向こうにぼんやりと明かりが見えた。それを見た山田君の顔が青くなる。

「あ、あわわわわ」
「落ち着け山田君!!」

私は山田君を後ろに下がらせ、その明かりへと向かっていく。

ギヤア、ギヤア!!

「ひゃあああああ!!」
「落ち着け山田君、いまのはカラスの鳴き声だ!!」
「だって……織斑先生エ……」

「
」

どこからか鼻歌が響き始めた。

この曲は……ゲゲゲの鬼太郎? しかもこのリズムは4期……つまり90年版。

「お化け……お化けが墓場で運動会ですよ!!」
「だから落ち着け、意味が分からんぞ!!」

私たちはさらに近づいて行く。そこにはチョウチンに『おでん』と書かれた屋台があった。

「「……屋台？」」

そして、のれんで顔が隠れた店主らしき人物を確認した。

「おんやゝ、お客さんかいな？ 今日のはてつきりだれも来ないから自分で調理して自分で食べようと思ってたんだけど……来たなら拒みはしないけど、あんまり種類は無いよ？」

私は店主に話しかける。

「それよりも、このIS学園の敷地内で勝手に屋台を経営されている。侵入者を許したとなると国際IS委員会や各国家から苦情が」

「ちよい待ち」

すると、店主は右手で私を静止した。

「IS委員会は存在する？」

「……どういうことだ？」

「実際、一夏がISを動かすようになって、使者を送ってきたか？」

こいつ……なぜ一夏のことを知っている？ それにまるで国際IS委員会が実体の無い組織のように。

「いや、ちゃんと存在するならいい。まったく……イズル氏もその部分を描写すれば数ページ埋まるのに……勿体ない……ぶつぶつ」

こいつはさっきから何を言っているのだ？ あまり意味が理解で

きないので、考えるのはやめた。

「立ち話もなんだし、お二人さん席に座りなよ」

「おい、いい加減に」

「ビールもある。料金はいらねえ」

「ご馳走になろう、山田君」

「ええ！？ 織斑先生！？」

タダ飯を食わせてくれるとはいいい店じゃないか。
とりあえず、山田君と一緒に屋台の席に座った。

「チョウチンにはおでんと書いてあるけど、今日のメニューは趣
向を変えて」

鍋の中で白っぽい何かが煮えていた。

一体なんだろう？

これは……ニラの匂い？

「 水餃子だ」

なるほど、水餃子か。日本では焼き餃子が主流だが、本場では水餃子が基本だと聞いたことがある。これがまた酒の肴に良く合ってうまかったりする。昔一夏が作ってくれたのも美味かったが、さて……この屋台の作る水餃子というのはどれほどの味 ん、どうした山田君。そんなにぽかーんとした表情を見せて……出来れば醤油と酢とラー油を取って欲しいのだが。

「織斑先生……この店主の姿が……」
「む？」

私は割り箸を割りながらその店主を見た。

パキンツ！！

「……ッ！？」

黒いスーツに猫の足跡がプリントされたエプロン。少し優しそうにも見えるが、凜とした目つき。

黒髪の短髪。

腰に装着されたポーチと出席簿。

あと菜箸。

「山田君、ここに鏡があるのか？」

「そもそも織斑先生は座っていて、立っている姿が鏡に見える訳
ないですよ……」

「だよな」

店主の声にも聞き覚えがある。

「初めまして、俺の名前は……いや、名前は後々面倒になるからニックネームだけ言うわ。俺の名前は『ドツペルゲンガー』だ。気軽に『ドツペル』って呼んでね」

⌋
⋮
⌋

[illegible]

山田君がそうなるのも無理はない。
そこには「私」がいたのだから。

転生者

【????】

転生者

【????】

本作の主人公orヒロイン。愛称は『ドツペル』。

本名不明、目的不明の転生者。

実は無くしたものを探すような行動が目撃されてはいるが、真相は分からない。

屋台で二週間粘って、原作キャラがやってくるのをずっと待っていた努力家。

数分後。

私と山田君は水餃子を食べていた。（ご飯もついてきた。もちろんサービスで）

「……おいしい？」

「色々聞きたいが……これが美味しいのは確かだ」

「ええ……おいしいです、本当に。どうやったらこんな味が出るんですか？」

「そりゃあんた……企業秘密だよ」

そう言ってドッペルは鍋の中の餃子を菜箸でかき回し始めた。

「そーいや俺……ちよつとIS学園でお仕事を臨海学校までの短い間、やることになった」

仕事？

「仕事とは……なんだ？」

「んー、仕事と言うか……なんかうまく思い出せないけど、俺はその時間まで何かを探さなきゃいけないって気がするんだ。部屋はちよつと？をいじって部屋増やした」

「「いつの間に」「」

「つことでよろしく、えつと……何て呼べばいい？」

「千冬で良いだろう。お前は私の教え子ではないからな」

「私は真耶です。よろしくお願いします」

こうして、謎の人物『ドッペルゲンガー』との出会いによって、私の災難は始まった。

続く。

第1話 そいつは転生者（後書き）

ご感想おまちしております。

体験版はここまでです。

ここからペースダウン……するにはまだ早いですが、ゆっくりです
のでご了承ください。

第2話 ドッペル千冬、襲来。(前書き)

今回でドッペルがどんなテンションなのかを紹介する話です。

第2話 ドッベル千冬、襲来。

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rはじめますよー」

みなさんご存じ山田先生による自己紹介のシーン。

山田先生は大人なのにすごく幼く……いや、凄いというほどではないが、同世代のようには見られるであろう。ちなみにナレーターしてる私は誰かって？ そりゃ……あなた、まだ秘密って奴ですよ

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

ここは原作通りで誰も返事をしない。

まあ、妙な空気だし仕方ないよね？

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号で」

おいおい、これでいいのか副担任。せめてもうちよつと喋ることくらいはあるだろうに……。さて、そろそろ一夏君の視線に移ろう。

一夏side

「織斑一夏くんっ」

「は、はい!？」

いきなり呼ばれて声が思わず裏返ってしまった。案の定、くすく

すと笑いを　これじゃあ落ち着かねエ。

？長い、省略！！

「ちょ、もうちょっと力入れろよ！！　って、誰に言っただ、俺」

「お、織斑くん……？」

ザザ　　ザザザアア！！

>>早送り

パンツ！！

「いつ　　！？」

俺はこの叩き方に覚えがあつた。

おそろおそろ振り向くと、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、良く鍛えられているが過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。狼を思わせるような鋭い吊り目。

「げえつ、関羽!？」

「うゝん、39点だな。赤点」

へ？

すると、千冬姉は俺の頭を撫でた。

「久しぶりだな、一夏」

「千冬姉　じゃなくて、何でここに　」

「待て、次は真耶の台詞だ。後輩が先輩の台詞を削っちゃいけない」

「す、すみません（地声）」

な、なぜか謝らなければいけない気がしたのはなんでだろう？

「えっと、あの……」

「真耶、俺が渡した台本の21ページ目だ。さっきのおどおどした演技は最高だったぞ？」

「ほ、本当ですか!？」

あのおどおどしたのは演技だったの!？

「ええ……では、あ、織斑先生。もう会議は終わっただんですか？
というか織斑先生ですか？　さっきはノリで流してましたけど」

「なんだよ、折角いい流れなのに」

「やっぱりあなただったんですね……はあ……」

なんだか生徒を置いてきぼりにして変な話が始まったぞ!？　いいのか、これで。

「とにかく……コホン。諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で殺戮マシンが正義の味方と言う微妙な紙一重でバランスがとられた選択肢しか選べないように魔改造するのが俺　いや、私の仕事だ！！断言してもいい」

「正義の味方とはかく、殺戮マシンは駄目ですって！！」

あれは俺の知っている千冬姉……いや、織斑千冬という生物だろうか。

「キヤー！！千冬様！本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導していただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

きやいきやいと騒ぐ女子生徒の前でニヤリとする千冬姉――（仮）。

「ならば……一夏、ちょっと席をどけろ」

「へ？」

千冬姉は俺の机の教科書などを入れるスペースからサイン色紙を取り出した。って、いつの間に。

「いまからサイン会を始めよう。全員で私を称えよ！！」

「「チ・フ・ユ！！　チ・フ・ユ！！（以下、繰り返し）」」

「

「高ぶる……高ぶるぞ！！私は今……猛烈に感動している」

「あの……痔のお薬のCMですか？」

「きゃああああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵
って！！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躑をして〜！」

おい、文章的に今のはどう考えてもおかしいだろ！！ いったい
何だ、この学園は……何かの洗脳電波でも流れているのか！？

「ふは、ふはははははは！！」

「ぬん！！」

ガシヤアアアン……。

すると、そこには千冬姉が何かを蹴ったようなポーズで佇んでお
り、なぜか教室のガラスが割れていた。

「まったく馬鹿共が……それにしても会議を延長させるほどの権
力があるところとはな、アイツは本当に何者だ？」

とりあえず俺は話しかけてみた。

「えつと……千冬姉？」

パアンツ！！

「！？」

「織斑先生だ、馬鹿者」

いきなり俺が知っているいつもの千冬姉へと雰囲気が変わった。

本当に何が何だか訳分かんねえよ。こうして波乱のSHRが終わるのであった。

一夏side end

ドッペルside

俺はガラスの破片と共に草木へと落ちていた。

「アッオウ……見てママ、おせんべいになっちゃった　アーハ
ハハッハー……!」

俺は両足のみを使って立ち上がる。常人にはちょっと難しい技だ。周囲には人はおらず、太陽の光がさんと降り注いでいる。日光浴には最高の一日だ。

「ふぁゝ……そういや、あんまし寝てなかったな……。餃子の新しい具の構想してたから」

俺は近くにあったベンチに座り、サンドイッチを頬張る。中身はツナマヨと卵の二種類だ。まるでヤギが草をむさぼるように食べていく。

「……チーズ&レタスも作っとくべきだったな」

そこで俺はあることに気付いた。そう、飲み物が無いのだ!!
どうしよう……水もいいが、こういうときはジュースかお茶が最適だ。さっそく探しに行こう。

キンコーンカーンコーン!!

ちょうど休み時間。買い出しには十分のタイミングだ。この顔ならば大体の無茶は通る。そうと決まれば行動あるのみ!! 俺は駆け出し 転んだ。

「アブシツ!!」

その頃。

「……………!!?」

篠ノ之箒は恐怖した。

偶然外を眺めていたら、そこには織斑千冬がいたのだから。そして教壇には織斑千冬がいる。箒はその事実困惑しながらも、胸の内に秘めておくことにした。

視点は戻る。
廊下にて。

偽千冬ことこの俺ドッペルは、飲み物を購入して弁当箱を持って立ち食いの姿勢をしていた。ちなみに、あのサンドイッチは軽食だ。朝食はこれから。中身は鳥の唐揚げ、卵焼き、サラダ（ワンポイントにミニトマト）、ご飯は梅干しのシンプルな弁当である。

「いっただつきまゝす」

俺が食べようとしたら、真耶がやってきた。

「えっと……ドッペルさんですよ？ 何やってるんですか？」

「何って……スタイリッシュ立ち食い。またはスタイリッシュ早弁？」

「スタイリッシュは基本なんです……」

「まあね、はい、あゝん」

「え、あの……」

「あゝん」

「あ、あゝ……ん」

真耶は唐揚げを食べた。

「おいしいでしょ？」

「おいしいです」

俺と真耶は一緒に弁当を

「そうじゃないです!!」

「え、なんか間違ってた？」

「間違いだらけです!! そもそもあなたが学園内にいるとややこしくなるのでやめてください!!」

「おおよ……ひどいわ真耶ちゃん」

カシャン。

周囲が暗くなり、俺にスポットライトが当たる。そしてヴァイオリンで悲しい音楽がなれ始めた。

「みんな聞いて、真耶ちゃんが……仕事疲れでいらだち始めている。誰か真耶を抱きしめたりなどして昔のように誰かに甘えていたころのピュアなハートを取り戻してあげて……！」
「ちょ……！」

「山田先生……！」

「真耶先生……！」

「やまちゃん……！」

「やまや……！」

ぞくぞくと真耶に人が集まってきた。手にはお菓子やらジュースやら肩たたき券まである。みんな初日なのに随分と団結力が高いな……真耶の性格のなせる業だろう。

そして生徒の誰かが新聞紙で出来たオスカー像とマイクを俺に渡した。そして俺はそのオスカー像を抱きかかえながら生徒たちに向かって叫んだ。

「ありがとう。この賞はみんなのおかげよ……！ 今私は……最高に幸せです」

パチパチパチ……！！

拍手喝采。

どこからかファンファーレのようなメロディが聞こえ、俺は生徒

たちに投げキッスをしながら教室へと移動した。

教室にて。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

なんだあの金髪ドリルロールダブルツインマークツーセカンド・バージョンツーカーカスタムエディション改は。まあ、何者かは大体知っているんだけどね。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ、訊いてるけど………どういう用件だ？」

「うん、俺も気になる」

「織斑先生！？」

「千冬姉！？」

「なんだ？ 俺に聞かれたらマズイ話なのか？ 心配するな、闇金業者や悪徳弁護士くらいだったらこの俺、日本が生んだ人間国宝……アメリカ文化に浸ったジャパニーズゲイシャガールであるこの織斑千冬が解決してやろう（ドヤツ）」

「アメリカ文化に浸ったジャパニーズゲイシャガールって……色々矛盾してないか？」

「あの……わたくしは置いてきぼりですよ？」

セシリア・オルコットは少し戸惑う。

「だまらっしゃい、愚弟と金髪（劣等遺伝子の意味を込めて）のクロワッサン！！ お前らの進級はこの私の手の中にある。つまりはお前らの発言しだいでは学園生活で一生を終えさせることも可能だ」

「「うわっ、やること汚い」」

ピピピッ！！

「おっと……栄養補給の時間だ。胸の谷間からソ ジョイを」

「千冬姉！！ 人前で胸を見せないでくれ！！」

「お、おお、織斑先生！？」

俺は胸をはだけるポーズを止めた。

「なんだ？ 上級者のように海パンからバナナ出すよりはマシだろうに」

「上級者どうこう関係ない！！ 弟として、露出はやめてくれ！！」

「織斑先生、いったいどうしたのですか！？」

俺は出しかけたソ ジョイを再び谷間へと戻した。

「しかたない、ならばブラに隠してあるスルメイカを」

「「わああああああああああ！！」」

叫ぶセシリアと一夏。

ガシッ！！

俺の方を誰かが掴んだ。

おれはギギギと頭を向けた。

「私の尊敬する織斑先生に……変なイメージを植え付けたくないでください……」

「どうした真耶、そんな『少し頭冷やそうか』の表情をして……待て、なぜ引つ張る？」

ズザザザザザザザ。

「うふふふふ」

「どうした真耶、俺の部屋はそっちには無いぞ？ それにしても良かったじゃないか、バレンタインでもないのにたくさん贈り物貰って」

ピシャンッ！！

教室の扉は閉められた。

ドッペルside end

「なんだっただ？」

「さあ、わたくしにもわかりませんわ」

「ところで……あんだ誰だ？」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを」

？以下、テンプレ。

屋上にて。

「……まだ怒ってる？」

「怒ってます」

山田真耶は頬を膨らみながら抗議の意思を見せていた。
風が両者の髪をなびかせる。

と、そこへ織斑千冬がやってきた。

「何をやっているんだ？ 授業が終わったので来てみたら」

「ちよっとお茶目したら真耶がすねちゃって……」

「お茶目で名誉棄損なんて信じられません」

三人は手すりによりかかる。まるで仲の良い三人の青春の1ページのようにも見える。

「ドッペル、あまり山田君をいじめるな」

「了解。それで……例のクラス対抗戦の話はどうなった？ 一夏とセシリアの決闘になるに2000ペリ力賭けるぜ」

「ペリ力という単位は知らんが、お前の予想で合っている。とい

うかなぜクラス對抗戦のことを知っている？」

「そりゃ秘密だ」

すると、千冬がドツペルの目の前まで迫った。

「まさかとは思うが……横槍を入れる気ではないだろうな？」

「さすが千冬だ、そのまさかのマサカリ担いだ金太郎飴が今なら10%ポイント還元だ」

ガンツ！！

「……！？ 痛いな、これ以上美人になつたらどうするんだ！！」

「安心しろ、これ以上美人にはならん」

「それ……千冬が言っておかしいと思わない？」

ドツペルの顔は織斑千冬。

織斑千冬は織斑千冬。

「……忘れてくれ」

「ところで真耶、一夏の部屋に引越し蕎麦持っていきたいんだけど、部屋番号知ってる？」

急に話を振られたので戸惑う真耶。

「えつと……1025号室だったと思います。まだ本人には伝えてはいませんが」

「よし、今日は麺を粉から作るぜ」

「私にもくれ」

「あ、私も食べたいです」

「はいはい」

こうして過ぎていく一日。しかし、まだ終わらない。
戦えドッペル、負けるなドッペル、抜けた記憶と探し物の正体を
掴むまで。

次回に続きます。

第2話 ドッペル千冬、襲来。(後書き)

ご感想やご意見をお待ちしております。

核心に関する質問は余裕で答えますが、他の読者へ見られてしまうので、そこは考慮してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9636y/>

IS インフィニット・ストラトス IS学園の笑う偽者

2011年11月29日21時48分発行